

厚生労働科学研究費補助金（がん臨床研究事業）
相談支援センターの機能の評価と地域における活用に関する研究
（研究代表者 高山 智子）

平成 24-25 年度 総合研究報告書

病院患者図書館と地域の公立図書館の連携とがん情報提供支援に関する研究

研究分担者 郡司 篤晃 特定非営利活動法人医療の質に関する研究会 理事長
研究協力者 田村 俊作 慶応大学文学部教授、慶応大学図書館長
小川 俊彦 逗子市立図書館 館長

研究要旨： 疾病に罹患し終末を迎える経過の段階ごとに情報ニーズが存在する。NPO医療の質に関する研究会は2008年度から5年間で50病院に患者図書室を寄贈してきた。その中には26のがん拠点病院が含まれる。しかし、病院では死についての情報提供ははばかられる。そこで、公立図書館との連携が模索された。図書館の専門家である研究協力者との検討を重ね、終末における情報支援の在り方、具体的な方法についてまとめ、結論とした。

A. 研究目的

がんは発病から治療、そして終末までの経過のそれぞれ時点で情報ニーズが発生し、支援を必要とする。

NPO「医療の質に関する研究会」は、2007年度以来、全国の病院を対象に、患者図書室を寄贈すること、および同図書室を拠点としたヘルス・リテラシーの向上を通して「協働の医療」の文化の醸成に取り組んできた。しかし、病院では死を迎える、あるいは死後の情報ニーズには対応しにくい。また、公立図書館等では疾病についての情報ニーズには十分に対応しにくい。そこで、病院図書室と地域の公立図書館との連携が必要であり、その具体策を検討し、実施し、評価することを目的とした。

B. 研究方法

本研究は研究協力者らがおおよそ月に一度の討論を重ね、連携の必要性と具体策について検討を重ねてきた。

（倫理面への配慮）

個人を対象としないので必要なし

C. 研究結果

NPO 質研は 2013 年度に、50 の病院に図書室を寄贈した。その中には、26 のがん拠点病院が含まれている。入室者数から見た図書室の利用のされ方には大きなばらつきが存在し、その差をもたらす要因は医療者の図書室の活用の差にあることがうかがわれた。また、基礎的なリテラシーの向上により、医療者とのコミュニケーションの質と効率が向上することも示唆された。しかし、死についての書籍は希少であった。今後のさらなる分析が必要である。

近年、図書館は単に静かに本を読む場にとどまらず、各種のイベントを開催するなど、地域の諸活動の拠点となりつつある。

討論の結果から、人々が病を得て終末を迎えるそれぞれの場面で、更に残された家族に大きな情報ニーズが存在するが、特にわが国では、いわば「周死期」に社会資本の減少に伴い大きな混乱がある。

具体的には、多くの取り組みがその可能性として検討された。

- 1) 諸々のシステムの構築：例えば、図書館側の移動図書館、団体貸出しなど、病院図書室の具体的なシステム
- 2) 技術的な開発：例えば、いわば電子図書室である「しらべる君」の共同評価・開発・閲覧、携帯端末などを活用した種々のコンテンツの充実・閲覧
- 3) イベントによる啓蒙・普及：関係者や団体等との共同でシリーズ化したシンポジウムの開催など

D. 考察

このような連携の重要性は「がん」だけに限られない。また、関係者の連携が病院と図書館だけにとどまらないことは当然である。現在でも多くのボランティア組織やNPOや宗教団体が存在する。その中にあってNPO 質研が寄贈した患者図書室や、がん拠点病院の相談支援センターは多くの関係者間の連携のイニシアティブを担っていくべきであろう。

現在、NPO 質研は、コンテンツ化（講演などのDVD化支援など）、インフォームド・コンセント及び患者用パスのIT化、納得度の評価尺度の研究・開発など、いわばツールの研究開発を行っている。これ

らの有用性を示していくことも重要であると考え。しかし、最終的に目指すべきは我が国における「周死期」の文化の醸成であろう。

E. 結論

公立図書館と患者図書室との連携は、我が国における「周死期」の文化の醸成に寄与することが期待される。

F. 研究発表

1. 論文発表
2. 学会発表

小村陽子、板垣貴志、郡司篤晃、河原和夫；「インフォームド・コンセント場面での患者における「納得度」の評価尺度開発に関する研究」、日本病院・医療管理学会（ポスター）、京都、2013.9.28.